

# 日独文化交流試論—四国から見た「世界」—

依岡 隆児

Betrachtung des Kulturaustauschs zwischen Japan und  
Deutschland —Die von Shikoku betrachtete Welt—

Ryuji YORIOKA

Abstrackt

Dieser Aufsatz versucht, den Kulturaustausch zwischen Japan und Deutschland aus dem Gesichtspunkt des Verhältnisses zwischen Shikoku und der Welt durch Deutschland zu betrachten. Die Welt, von der ich spreche, unterscheidet sich von der Internationalität und setzt nicht immer den Staat vor. Das heißt, man kann damit die Kultur, die nicht von Japan als dem modernen Nation State überdeckt werden kann, klar machen. Also setze ich eine periphere Region in Japan, „Shikoku“, als Festpunkt in Betrachtung und mache „Deutschland“ als Vergleichsmaßstab zu Shikoku.

Die Deutschen, die nach Shikoku kamen, waren z. B. Deutschlehrer, Kriegsgefangene und private Reisende. Sie waren keine Staatsmänner oder Staaten gegenüber verpflichtete Personen. Sie hatten viele spontane Austauscherfahrungen mit den hiesigen Bewohnern und der Natur. Und die Einwohner Shikokus, welche mit Deutschland in Kontakt kamen, waren im Gegensatz Elite, die zu der Modernisierung Japans viel beitrugen, aber sie haben Deutschland im Vergleich zu ihrer Heimat gesehen. Durch diese Sichtweise kann man vielleicht einen kulturellen Austausch in der tieferen Schicht sehen. Ich glaube, eine solche

Betrachtung lasst uns über Japan als kein homogenes Land in der globalisierenden Welt erneut nachdenken.

Hier werde ich zuerst über die kleine Austauschgeschichte zwischen Shikoku und Deutschland beschreiben und dann Texte über Shikoku von Deutschen, die nach Shikoku kamen, und danach die von Einheimischen Shikokus, die sich mit der deutschen Kultur beschäftigt haben, betrachten.

はじめに

本論は、日本とドイツの文化交流について、四国と「世界」との関連を中心に考察する試みである。ここでいう「世界」とは、「国際」とは異なり必ずしも国家を前提としておらず、文化的まとまりとしての「地域」が他の文化との交流において始めて発現する特性であると考え。また、「四国」をドイツとの関わりで見ること、「日本」という近代国民国家に収斂されない地域としての文化のあり方を明らかにすることができる考えた。むろん、このような論考が従来あまりなされてこなかったこともあり、方法論的にも学術的妥当性が懸念されるが、グローバル化の中で「日本」のあり方を様々な観点で考察することが求められる現代において、こうした試みもそれなりに意味があると考えた。

本論は、「日本」というフィルターをいったん取り去る。すなわち、「日本」というフィルターがグローバルなつながりをかえって見えにくくしているという懐疑心からスタートする。すなわち、国民国家としての文化的統合が、文化的ステレオタイプ化した日本イメージを作りがちだとすれば、閉鎖的で国粹主義的な文脈の中で、他国との違いのみが独自性としてことさら強調されてしまう。こうしたイメージは国際関係論上の論議では便利ではあるが、他方ここからは日本の中にも内在するはずの文化の多様性を基にした普遍的な（グローバルな）要素が見えにくくなる。近代化が洋の東西を問わず、都市化と均一化を推し進め、そのモデルが欧米にあったとすれば、日本の都市的西洋近代化においては、文化的多様性は見えてこなくなるといわざるを得ないだろう。

そこで、本論は試みに、いわゆる「中央」から離れている「四国」という一地域にあえて定点を置いてみた。そして、この「四国」にグローバルな光を与えるために比較の観点を「ドイツ」に据えた。（ここで「ドイツ」とは「ドイツ語圏」を含意している。）また、「文化交流」とは、単に国家や地方自治体、特

定の交流団体が行うものだけを指すのではない。四国にやってきたドイツ人たちは必ずしも国を背負った学者や政治家、実業家、芸術家ではなかった。ある者はドイツ語教師として、ある者は捕虜として、そしてある者はプライベートな旅行者としてやってきた。その分、地域との自然な触れ合いも多くあったはずである。周りにドイツ人はもとより欧米人も少ない環境で日本人の生活に触れざるを得なかったのである。また、逆に、四国を出身地としてドイツと関係を持った人々は、エリートとして日本の近代化に貢献した人が多かったが、ただ、彼らが振り返って四国を見るとき、ドイツを自分の故郷を通して見ている側面に着目すると、国家同士のつながりとは異なる地域におけるより深層における交感のあり方がみえてくるのではないだろうか。こうした問題意識のもと文化の交流のあり方をここでは「文化交流」ととらえた。このような考察は、均質化された日本とは異なるこれからの時代の日本の国際化・グローバル化を再考することになるはずである。したがって、国家中心・中央主導の国際化ではないところにいかなる可能性があるのかを検討する材料を提供することが本論の目標ともなる。

本論の手順としては、まず四国とドイツとの文化交流略史を述べて、次に、ドイツとの関係でみた「四国」をドイツ人の書いたテキストと、四国出身者が書いたテキストを、それぞれ検討して、双方向的に考察していく。

## 1. 四国とドイツの文化交流略史

### 1-1 江戸時代

四国とドイツとの関わりでは、まず、1771年土佐沖に漂着し、阿波と奄美大島に立ち寄ったオーストリア人ファン・ベンゴロ（ハン・ベンゴロウ、本名はベニョフスキ）がいる。彼はハンガリー＝オーストリア皇帝軍将軍の子として生れ、ウィーンで育ち、後にオーストリアの軍務に就いた人である。次に、1823年にオランダ商館の医師として来日したドイツ人シーボルト（ヴェルツブルク生まれ）の娘おイネはシーボルト帰国時の一時期、宇和島のシーボルト門下生・二宮敬作（1804-1862）の下に預けられた。シーボルトの弟子に四国出身者がいたことは特筆すべきことだろう。<sup>1</sup>二宮の甥・三瀬諸淵（周三）（1839-77）も愛媛県大洲生れで、1859年に再来日したシーボルトに学び、61年にはシーボルトに随行し江戸参府を果たすが、その後、捕らえられる。彼はシーボルト

<sup>1</sup> 参考、藤森成吉『若き洋学者』、日新書院、1942年。

の孫・楠本高子と結婚。後に大阪医学校病院に勤務した。

また、シーボルトの高弟・美馬順三(1795-1825)は、那珂郡羽ノ浦生まれで、長崎留学し、蘭学を学んだ後、シーボルトに師事、鳴滝塾初代塾頭となった。蘭語論文「日本産科問答」は、シーボルトの斡旋で海外の学術雑誌に掲載された。日本人の論文が海外の学術雑誌に載った日本最初のことだった。「日本人の絨術について」「日本古代史考」「米について」など蘭語論文は、シーボルトの日本研究の資料にもなった。

同じくシーボルトの信頼の厚かった高良斎(1799-1846)も徳島生れである。シーボルト事件に連座したが、後に大阪蘭学塾で教え、ドイツのチットマンの外科書の抄訳、ドイツ人ベントリジセチの性病学の訳を残した。眼科など西洋医学の啓蒙に貢献した。<sup>2</sup>

さらに、シーボルトに師事した伊東玄朴(1800-1871)は肥前藩生れながら、江戸詰め徳島藩医となった。このように、シーボルトの弟子で、とりわけ彼の信頼の厚かった者が、四国の出身者、あるいは、四国にゆかりのある者に多かったのである。

## 1-2 幕末から明治にかけて

日本とプロイセン、ならびにオーストリア修好通商条約締結(それぞれ1861年、1868年)後、ドイツ語圏への日本文化の紹介もなされたが、19世紀末には日本の大陸進出と三国干渉が起こり、欧米では黄禍論が広まった。ドイツ人のお雇い学者の来日、日本からのドイツへの留学などをもとにした交流もあった。そんななか、幕末から明治にかけては使節団の一員として、あるいは留学生としてドイツに渡った四国の人々もいる。四国の人間で最初にドイツを見たのは、おそらく阿波の原覚蔵(一介、鵬雲)(1835-1879)だろう。1861年、フランス、プロイセン、イギリス、オランダ、ロシア、ポルトガルを訪問する文久遣外使節団(竹内下野守正使)に混じって渡航している。次に、1870年の岩倉使節団として土佐から林有造が参加しており、プロイセンを訪問している。留学生としては、1872年に土佐の萩原三圭(守教)がドイツ留学し、後に京都帝国大医学部長、侍医になった。<sup>3</sup>徳島出身の長井長義(1845-1929)は長崎

<sup>2</sup> 参考、福島義一『阿波の蘭学者—西洋文化を伝えた人たち—』、徳島県出版文化協会、1982年。

<sup>3</sup> 参考、宮永孝『日独文化人物交流史—ドイツ語事始め—』、三修社、1993年。尾佐竹猛

留学後、1873年ベルリンに留学、ベルリンでホフマンについて薬学研究をした。1881年ベルリン大助手になり、十三年間滞在しドイツ人と結婚した。1884年に東京帝国大学薬学科教授となり、85年にエフェドリンを発見した。日本薬学会会頭となる。女子教育に尽力、日本女子大を創設した。1911年日独協会創立とともに理事長に就任。1925年の徳島高等学校（徳島大工学部）開設時に、製薬化学科（薬学部）設置に尽力した。（現徳島大学の薬学部構内に胸像がある。）

<sup>4</sup>池田謙蔵（三）は松山出身で、1874年にドイツ留学、後に実業家になった。また、久松定弘（1857—1913）は今治出身で、1876年にドイツ留学、独文学者となり、私塾「理文学舎」を開き、翻訳活動をし、貴族院議員も努めた。

三宅速（1867—1945）は徳島穴吹生れで、東京でドイツ人スクリッパに学ぶ。欧州に留学し、1898年私費でドイツ留学、1904年官費でドイツ留学を果たした。後に、日本外科学会会長となる。1908年九大外科学教授。1931年『日本における肝石症』で学士院賞。1922年欧米視察から帰国の北野丸で、アインシュタインの盲腸を診察、それが縁で親交を結ぶ。45年に死んだとき、アインシュタインがその死を悼み、追悼を寄せる、穴吹にその碑がある。<sup>5</sup>

三宅克己（1874—1954）は徳島助任生まれの水彩画家である。ドイツ帰りの原田直次郎（：森鷗外『うたかたの記』のモデル）にも習う。1897年エール大、イギリスに留学。帰国後、長野で島崎藤村と交友。写真術も収め、東京美術学校写真科の主任教授となった。三宅は世界をよく周り、博識で趣味豊かな故に、外国旅行者のための「よき案内書」の企画を任され、ドイツも含めて世界の諸国を巡って、『世界めぐり』（誠文社、1928年。）を書いている。世界旅行が民間でも現実的になってきた時代の海外旅行手引きのはしりといえる。（『欧州写

---

『幕末遣外使節物語』、講談社学術文庫、2002年。宮永孝『文久二年のヨーロッパ報告』、新潮社、1989年。

<sup>4</sup> 参考、山城科作「長井長義先生明治四年欧米見聞書翰」。金尾清造『長井長義伝』（日本薬学会創立八十年記念事業）日本薬学会、1960年。長井長義・徳島大学薬学部長井長義資料委員会編『長井長義長崎日記』徳島大学薬友会出版部、2003年。長井長義・阿波藩同業組合編『長井長義氏講義録』私家版、徳島、1901年。『日独いしずえの歴史—長井長義』Eine japanisch-deutsche Gründergeschichte. Dr. Phil. Wilhelm Nagayoshi Nagai (1845~1929). Goethe-Museum Düsseldorf, Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin 2000.（徳島大学薬学部渋谷教授の論文収録。）

<sup>5</sup> 今市正義「三宅速とアインシュタイン」日本医事新報社、1955年。

真の旅』(アルス社、1923年。)でもドイツ紀行の節がある。)

山県伊三郎(1857-1927)は萩生れで、1871年に渡欧、ベルリン大学でドイツ学を学び、ベルリン公使勤務を経て、96年に徳島県知事に就任した。

### 1-3 大正から昭和にかけて

第一次世界大戦ではドイツとも日本は敵国同士となったが、捕虜となったドイツ人が松山、丸亀、徳島の俘虜収容所に収監された。後に、徳島の板東に統合された。約一千人のドイツ人捕虜が約三年半をここで過ごしている。所長の松江豊久大佐のおかげで、自由な収容所生活が維持され、地元の人々との交流も生れた。収容所の新聞『ディ・バラック』にも記事がある。また、戦後も日本に残ったり日本との関係を維持した元捕虜たちもいる。後に述べるように、彼らは四国についての記述も多く残している。

大正期は教養主義の時代でドイツ、特に新カント派からの影響が大きかった。大正末期にドイツに渡った者としては、哲学では、安倍能成(1883-1966)がいる。彼は愛媛生まれの哲学者、教育家である。漱石門下で、1923年から26年までドイツなどに留学、カント研究に従事した。戦後文部大臣となった。<sup>6</sup>

南原繁(1889-1946)は香川引田生れで、政治学者、1921年から24年までヨーロッパ留学、カント研究で有名である。東大政治学講座を担当、終戦後初の東大総長となった。

大正末期から昭和初期にかけては、モダニズム芸術がドイツから入ってきた。演劇では、新劇の土方与志(1898-1959)は、高知がルーツである。祖父の影響で演劇に興味を持つ。大正時代にベルリンなどに遊学(1922、23年)してから、1924年に築地小劇場設立、ドイツ表現主義演劇受容を行った。<sup>7</sup>ちなみに、この築地小劇場の第1期研究生(1924年)には愛媛出身の俳優・丸山定夫(1901-1945)がおり、小劇場の第1回公演「海戦」(ドイツ表現主義のゲーリング作)の開幕を告げる銅鑼を鳴らしたことで知られる。

文学関係では、後述するように、片山敏彦(高知)や佐古純一郎(徳島)がドイツ文学との関連がある。また、高浜虚子(愛媛)がベルリンで俳句の講演を行い、海外での「ハイク」普及に努めた。

軍関係では、乃木希典(1849-1912)は1886年から88年までドイツ留学

<sup>6</sup> 参考、安倍能成『我が生き立ち—自叙伝—』、岩波書店、1966年。

<sup>7</sup> 参考、依岡隆児「日本におけるドイツ表現主義の受容—初期築地小劇場を中心に—」、『言語文化研究』第8巻、徳島大学総合科学部、2001年。

をし、その後、一時期丸亀にいた。また太平洋戦争でシンガポール攻略によって知られ、マレーの虎と呼ばれた陸軍の山下奉文(1885-1946)は高知出身であるが、ドイツ留学をし、1918年にオーストリア駐在武官となった経歴の持ち主である。愛媛出身の水野広徳(1875-1945)は『此一戦』を書いたが、1919年ヨーロッパ旅行でドイツの惨状を見て、軍国主義に幻滅を感じた。軍縮論者として知られる。同じく愛媛の桜井忠温(1879-1965)は、『肉弾』(1906年)を書き、ドイツ語訳(1911年、A. シンチンガー訳)も出た。シンチンガーの訳者序文もある。<sup>8</sup>この点については、この当時、どのような精神的交感が両国の間に生じていたのかを追究する価値もあるだろう。テレビドラマの原作となった林謙一『おはなはん』(文藝春秋、昭和41年。)の「おはなはん」こと深尾はなは徳島出身だが、その夫・林三郎は親ドイツ的で陸軍士官学校教官から駐ドイツ日本大使館付武官補佐官に赴任が決まった矢先、病死している。「おはなはん」の孫はドイツ人の女性と結婚しているが、著者の林謙一はここにドイツとの縁を感じている。

工学経済学者の三木正一(徳島)は、昭和の初めに世界一周をしている。彼は当時のドイツについて、第一次世界大戦後十年ですでに経済復興したと述べ、工業・経済を中心に報告している。日独貿易については、日本の輸出超過で、しかも、日本からの輸出品が生糸、羽二重、樟脳、缶詰である点で、前途が有望でないと分析している。(三木正一『外遊雑記』、青年文化協会、昭和4年。)

実業家としては、高橋龍太郎(1875-1967)が愛媛・内子生まれで、「ビール王」と呼ばれた。1898年から1904年までビール醸造技術研究にドイツ留学。後に、大日本麦酒会社社長。戦後はプロ野球高橋ユニオンのオーナーとしても知られる。

大正から昭和にかけては松山と高知の旧制高等学校にドイツ語教師として赴任したドイツ人がおり、四国にまつわる文化研究や興味深い紀行文を残している。(後述)

#### 1-4 第二次世界大戦後

日本とドイツは第二次世界大戦では同盟国となり、1930年代後半は国家主導の交流は盛んだったといえるが、特に戦時下ではやはり民間の文化交流は制限された。第二次世界大戦後は、政治家では吉田茂(高知)が西ドイツ首相アー

<sup>8</sup> 参考、『明治文学全集97 明治戦争文学集』、筑摩書房、1977年。

デナウアーと比較された。また、徳島市長豊田幸太郎が西ドイツ政府から招かれ、訪問するなど地方行政レベルでの日独交流が始まった。彼は1965年夏、ドイツに行き、フランクフルトやケルンの市長を訪問。世界一の経済成長を誇る西ドイツの秘密を知ろうと、教育制度、道路状況、徳島でも問題になっているゴミ処理などを積極的に見て回った。ここには経済大国ドイツに学ぶ姿勢がうかがわれ、特に環境問題でのドイツの先進性はこの頃から注目されていたことがわかる。また、ドイツの国民性、日本に対する認識の考察もある。さらに、特筆すべきことは、彼が板東俘虜収容所の生存者（三十名ほど）の団体の幹部をしていたレオポルトをコーブルクに訪問していることである。その仲介の労をとったのは長井長義の息子長井亜歴山（東京在）であった。レオポルトは久留米、似島を経て板東に来たが、それと較べても板東収容所が非常に親切だったと評している。また、原元徳島知事が当時、収容所近くで木管会社を経営しており、捕虜たちを十五人雇っていた話もした。原は当時ドイツ人の間で松江大佐と同じくらい人気があったという。（豊田幸太郎『西ドイツに招かれて』、徳島市役所、1965年。）今日の徳島とドイツとの親近性があるのは、板東俘虜収容所のおかげといえるだろう。

一方で、板東俘虜収容所の元捕虜たちやその子孫たちと地元鳴門市の間に活発な文化交流が始まる。きっかけは坂東で高橋春枝がドイツ兵墓地の清掃活動によって、西ドイツ大統領からドイツ国勲章功労章を贈呈されたことである。ドイツ在住の元捕虜たちは「バンドー会」を結成していた。地元・板東では1972年にドイツ館とドイツ村の創立、1978年に「ドイツ兵士合同慰霊碑」を建立した。元捕虜の中には四国を再訪する者もいた。また、ギュンター・グラスらドイツの現代作家たちも徐々に四国を訪れるようになった。

最近では、徳島ゆかりの賀川豊彦についての研究書がドイツで二冊<sup>9</sup>出されたことも注目に値する。『死線を越えて』は逸早くドイツ語訳されていたが（Toyohiko Kagawa: *Auflehnung und Opfer: Lebenskampf eines modernen Japans.* (übersetzt von Wilhelm Gundert) Stuttgart 1929.）、最近は、キリスト教徒として、平和主義者としての側面がドイツにおいて高く評価され始めてい

<sup>9</sup> Ralf, Silke „Die Rolle Kagawa Toyohikos (1888-1960) in der japanischen Arbeiter- und Gewerkschaftsbewegung unter besonderer Berücksichtigung seiner religiösen Haltung als Christ“ München 1998. Schell, Karl-Heinz „Kagawa Toyohiko (1888-1960). Sein soziales und politisches Wirken“ München 1994.



るのかもしれない。賀川自身もドイツに行ったことがあるし、<sup>10</sup>1922年に来日したアインシュタインとの交友も知られる。ちなみに、賀川の協力者・馬島備(1893-1969)は、名古屋生まれの医師、社会運動家であるが、父が徳島の教会牧師だった関係で、徳島中を出て、やがて、賀川のもとへ行った。1920年から23年まで、産児調節医学習得のためシカゴ大、ベルリン大に留学。生活共同組合、日中ソ国交回復に活躍した。また、船本宇太郎(1895-1935)は海南生れで、板東収容所のドイツ人の指導を受けてドイツ式酪農を継承し、「ドイツ牧舎」を作った。後に「ドイツ兵を偲ぶ会」の世話役を務めた。

また、四国にまつわる日本文学の中でドイツ語圏の作家の影響を受けている作品がある。村上春樹が小説『海辺のカフカ』(上下、新潮社、2002年。)を書き、四国(特に、香川)を舞台にしている。主人公の少年のあだ名が「カフカ」とされ、四国が「不条理の浪打ちぎわ」とイメージされていた。生と死の境にある土地として、四国にはカフカのイメージを呼び寄せる力があったということだろうか。ドイツ語訳はすでに出ている。ちなみに、カフカの影響という点では、倉橋由美子(高知)も知られている。『変身』のパロディを作品化している。(「虫になったザムザの話」、『大人のための残酷童話』、新潮社、昭和59年。)

画家の田島征三(高知)(1940-)の書いた『絵の中のぼくの村』(くもん出版、1992年。)が、1996年に映画化された。(東陽一監督)彼の少年時代の高知での思い出が描かれるこの作品はベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞した。

ドイツとの姉妹都市としては、鳴門市とリューネブルク市<sup>11</sup>、松山市とフライブルク市、内子町とローテンブルクがある。<sup>12</sup>また、四国の日独協会では、

<sup>10</sup> 参考、『雲水遍路』、改造社、1926年。

<sup>11</sup> 1974年に姉妹都市提携(両市とも製塩業が盛んで、人口規模も同じで、自然が豊かというのが理由)、78年から親善使節団交互派遣、87年と93年には鳴門からの使節団がリューネブルク市で阿波踊りを披露、84年には両市の高校が姉妹校提携、94年ドイツェス・フェスト in になると、2000年にはドイツェ・ヴォッヘン in になるとがそれぞれ始まる。2001年には「第九」里帰り公演、1996年からは国際交流員がドイツ館に在勤。また、眉山中腹の西部公園のドイツ兵墓地で慰霊の歌を捧げたことが縁で、徳島少年少女合唱団のドイツ公演が実現、ホームステイと各地での公演活動を続けている。

<sup>12</sup> その他にもドイツ系の「四国人」はたくさんいる。徳島関係でみても、哲学・エンゲルス研究の加藤正、ハイデッガー研究の川原栄峰(『ハイデッガーの哲学と日本』、高野山大学、1995年)、ガラス工芸家・美術研究家の由水常雄、運輸業でドイツ駐在をしていた森隆行(『ラインの風に吹かれて』、鳥影社、2001年。)作家の岸文雄(『安らぎの日々

愛媛日独協会（1957年）、徳島日独協会（1960年）、鳴門日独協会（1978年）、高知日独協会（1980年）、香川日独協会（1991年）がそれぞれ設立された。

さらに、ドイツ語圏の日本人学校には、日本から公立学校の教師が派遣されているが、四国関係ではウィーン日本人学校で校長を務めた谷脇誠治郎（高知）がいる。（『ウィーンの風』、南の風社、1991年。）

以上、四国とドイツとの文化的関わりを、まだまだ不十分とはいえ、概観してきたが、意外にも多く、両者にはつながりがあることが明らかになったことだろう。東京中心の文化とは異質な地域性が、かえってドイツ性、あるいは国際性につながっていったこともあったようである。以下、具体的にドイツ人、もしくはドイツとゆかりの四国人が四国について言及したテキストを引用しながら、こうした地域性と国際性の結びつきについてさらに考察してみたい。

## 2. ドイツとの関係でみた「四国」（1）—ドイツ人のテキストから

### 2-1 ドイツ人俘虜収容所関係

まず、第一次世界大戦時のドイツ人板東俘虜収容所において発刊された新聞『ディ・バラッケ』から、ドイツ人たちの四国の印象を拾ってみる。『ディ・バラッケ』の第1巻（鳴門市、鳴門市ドイツ館史料研究会訳、1998年。）では、「故郷」というテーマでの懸賞作文で2等賞をとった「晩秋」（オイヒラー予備副曹長）が収容所の秋の情景から故郷のことを思い出すという趣旨で書かれている。黄葉した落葉の上に霜が降り、楓の焚き火をしているとき、「大枝の中から苔むした幹や実をつけた小枝の間から音もなく思い出が私の方に近づいて来る」（同書、162頁。）とある。また、第2巻（鳴門市、2001年。）1918年3月31日27号では、「展覧会の日本人観客」の記事をクルト・マイスナーが書いている。ドイツ人たちが日本人をどう見ていたかが知れて興味深い。収容所の展覧会に日本人がやってきて大盛況だったが、マイスナーは日本通らしく、日本についてたくさんの本が書かれてきたが、日本に世界旅行のついでに立ち寄っただけでその印象を個人的な感情で書いたものも多く、「滑稽だが、根絶できないおとぎ話」（同書、6頁。）を作り出したと批判している。そして、松山収容所から来た彼は、「田舎臭い住民の来観を覚悟」した（同書、6頁。）とし、

---

に』、徳島出版、2001年。ドイツ・オーストリア旅行記収録）などがあるが、今回はこれらを文献リスト化することはできなかった。

松山ならもっと「進んだ」観客がくるだろうとして、とんちんかんな質問をする客や、出兵する戦死に妻がキスをするシーンを描いた絵を見て笑い出す客のことを書いている。また、日本人一般の誉め言葉は真に受ける必要はないと述べている。(同書、7頁。)また、1918年4月7日28号の「展覧会の観客」(H.C.)ではマイスナーとは違った観点から展覧会について報告している。「四国の娘たちの、世評に高い美しさについては、ほんの少ししかみられなかった」(同書、26頁。)としているが、女学校の生徒たちは大変好ましかったとしている。ここでも「際限もなく思われる賛嘆と異常な丁寧さに騙されるかも」(同書、26頁。)しれないとして、日本人の過度に賛嘆したり丁寧だったりするのをいぶかっている。また、「あの永遠の微笑」(同書、26頁。)を指摘して、日本人の微笑について考察をしている。さらに、ドイツ人たちが食事をしているのを見ていた日本人の小さな女の子が「くさい」と言ったことには、ひるがえって、自分たちドイツ人が日本の食事に対して同様なことを言ったとしたら、と考えさせられたとある。相手の視点で自分たちを見返す異文化に対する姿勢が読み取れる。そんなとき、ドイツ人はきっと微笑を身につけるつもりはないだろうと結ぶ。(同書、27頁。)1918年5月12日31号では、「阿波の国の4月」というエッセイをマイスナーが書いている。ドイツでは日本では「花は匂わず鳥は歌わず」と聞いていたのに、それはでっち上げで、ここではヒバリは歌っていると述べている。(同書、120頁。)この日本についての風説の由来は不明である。田んぼで4歳の子どもが「オハヨー」とか「マスキー」(ドイツ人が教えた中国語)と声をかけてきたので、彼が「グー・テン・ター・ク」と答えると、顔を輝かせたということを報告している。(同書、122頁。)1918年6月9日37号にはやはりマイスナーによる「四国霊場八十八箇所への巡礼」がある。巡礼の由来、弘法大師のこと、風習などについて説明し、四国地図や絵を載せている。地元の文化や歴史に関心を持ち始めていることが知れる。霊場巡りについて行き、「四つの国」について見聞したいとも述べる。そうすれば、魂の救いと、足腰の鍛錬になるだろうと結んでいる。(同書、198頁。)1918年9月15日51号には、「K.」による「海のさざめき」というエッセイがある。「8月、一日が終わり、憩いするとき。耳に海の音が響いてくる。力強い海はいっそう間近に聞こえてくる」。(同書、463頁。)いつしか夢を見ていて、その中では逃げたくても逃げられないで、海岸に座り込んでいる。「巨大な化け物」(同書、464頁。)が迫ってくるような感じに襲われる。するとそのとき、「気を付け！」という衛兵の交代の音がして、目が覚め、ベットに向かう。「外では海が、力強く穏やか

に休むことなくざわめいている。夢の中で、また歌ってくれ、けれどももっと静かにもっと美しく。夢は私の憧れの遥かな目標、ドイツの海へと連れていってくれる」(同書、464頁。)と述べ、荒々しいとはいえ、四国の海を通して、ひそかに故郷の海へ思いを馳せている。

1918年9月1日49号に「地質学的探索」で建築用地についての報告が、第3巻(鳴門市、2005年。)1918年10月6日54号、同年10月20日56号、同年11月10日59号には「地学巡検」という題で、板東周辺の土地についての地学的報告が連載されている。「天井川」や植物痕跡、地層の褶曲などについて地図付きで述べられている。また、56号の「収容所漫筆」(「K.」)には「日本の伝説的で美しい秋の日、好きになるのは当然の秋の日」(同書、41頁。)とある。さらに、1918年10月27日57号の「大坂山への遠足」では阿波と讃岐の境の境界石からの眺めを「華やかなパノラマ」とし、「これは油絵」だと感嘆する。(同書、59頁。)こうした収容所近郊への遠足はよく行われ、散歩好きのドイツ人には大好評だったが、それは徳島の自然に触れる機会ともなった。さらに、これは捕虜たちにとって、「単に自然の美を堪能しただけでなく、スプーン一杯の自由も味わえた」(同書、60頁。)機会だったと述べている。

1919年2月9日72号の「収容所漫筆」(「K.」)には雪が降ったことが報告されている。「この前の月曜日、故郷でわれわれを待ち受けている楽しみを少しは味わうことができた、とういうのはその朝、驚いたことに戸外をひと目見るや素晴らしい雪景色になっていたからである。われわれは童心に返って雪合戦をした」。(同書、294頁。)四国の自然がドイツ人の心を慰め、彼らは「自由」をつかの間味わっている。故郷への思いも、四国の自然・風土に触れる中で目覚めているといえる。

1919年2月23日74号の「われわれの遠足」では、今度は近隣の山から吉野川堤防、鳴門海峡まで、十日間にわけて行われた遠足のことが報告されている。「中国人なら、お金も支払われないこのような苦労を理解できないだろう」という山歩きが、ここでも「山上ではわれわれは、すてきな報酬を得た」として自然を満喫している。(同書、325頁。)鳴門では本物ではないが「激しい流れ」の渦を見、浜辺の「塩田」を観察している。(同書、327頁。)同号「収容所漫筆」では、地元の人々については「われわれは人々とは付き合いたくないが、少なくとも土地についてなら、自分で何かを見たり知ったりできる」(同書、329頁。)と述べて、もっぱら土地に対して好奇心があるとしている。

次に、この収容所の捕虜の一人で『ディ・バラック』で日独比較文化的な視

点で多くの興味深い記事を書いていたクルト・マイスナー (Kurt Meißner, 1885—1974) についてであるが、彼は後に日本東アジア友好協会会長をし、日本文化の紹介者となった。ハンブルクの出版業者オットー・マイスナーの次男で、二十歳で来日。横浜のシモン・ヴェルト機工商会の駐在員となり、1914年ドイツ軍人として応召。捕虜となり松山から板東へ移管された。収容所内では通訳をする。解放後、日本でレオポルト商会支配人、機工貿易会社社長。滞日六十年で、ハンブルクで亡くなっている。『滞日六十年』『日本におけるドイツ人の歴史』『横浜のドイツ人』『日本のドイツ文化』などの著書がある。

なかでも、1973年の『滞日六十年』(Kurt Meißner: Sechzig Jahre in Japan. Lebenserinnerungen von Kurt und Hanni Meißner. Hamburg 1973.以下、KMと略す。)は自伝であるが、ここにマイスナーの板東収容所時代のことが書かれている。1917年に松山から板東に移った彼は、ここでは「収容所を保養所のようにすることができた」(KM, S. 85)と述べている。所長の松江大佐が「寛大な人間」であったためで、彼は「五人の精神障害者を出すくらいなら、百人の酔っ払いの方がいい！」(KM, S. 85)と述べて、松山では禁じられていたビールを飲むことを捕虜たちに許した。彼は収容所での娯楽として「クシギ」でヨットをしたことも思い出している。「忘れがたく美しい海岸の内陸海」で、「海はガラスのようで、少し中に入るだけで五メートルに達した。魚を売る女たち。私たちはそれをすぐに浜で調理して食べた」。(KM, S. 85) 収容所での余暇は「有効に使うことができた」という。「そのあまりやりすぎて暇がないくらい」だった。(KM, S. 86) 地元の人々との交流にも通訳として立ち会っている。ドイツ人コックが日本の婦人にジャガイモ料理を教え、捕虜の中の学者が経済の講演会を開き、二人の園芸家は日本人の農夫にトマト栽培を伝授している。そのおかげで「この地は今日(1973年時点—筆者注)では日本で最大のトマト産地である」。(KM, S. 86) マイスナーは日本語通訳として収容所で大活躍だったはずだが、その割には収容所時代の記述は短い。四国の印象もあまり述べていない。

ただ、後に徳島の古狸の合戦についての伝説の翻訳を出しているように、この時代、彼は四国の民俗や文化に関心を抱いていた。『阿波の狸合戦』(Kurt Meißner(übersetzt): Seltsame Geschichte aus Shikoku. Der Krieg der alten Dachse. Eine wahrheitsgetreue Überlieferung. Mündlich vorgetragen von Kanda Hakuryu, einem berufsmässigen Erzähler von Helden- und dergl. Geschichten. Tokyo 1932.)の訳者の「序」では、「狸合戦」の話は「四国でも

つとも有名な民間伝承」とされ、「五年間、四国の収容所で生活しなければならなかった時、警官と一緒に作業した農夫たちからたくさんの狸物語を聞いた」ことが興味を持ったきっかけだったと述べている。なお、協力者として、「友人」のヘルマン・ボーナーが手伝ってくれたとある。

次に、ヨハンネス・バート (Johannes Barth, 1891-1983) はブレーメン近郊で生まれ、同じく板東俘虜収容所捕虜だった人である。ロンドンで漢字に関心を持ち、1911年に二十二歳で中国広東省ドイツ系商社へやってきた。大戦に応召、青島で降伏する。丸亀から板東へ移される。日本語学習は1919年から始めた。解放後も日本に残り、貿易商となった。日本人を妻(千代夫人)とした。戦後は鎌倉で貿易商。日本文化を紹介し、『鎌倉時代の歴史と文化』『日本演劇の歴史』『江戸時代の歴史と文化』を著す。OAGの副会長として、マイスナー会長を補佐した。ドイツ館落成式には元捕虜代表として出席している。

バートの『五十年一ひとつの夢』(Johannes Barth: 50 Jahre - ein Traum, 1968. (タイプ字未刊行))には四国再訪のことが記録されている。それによると、彼は1968年3月12日から18日まで高松、丸亀、高知、徳島、板東と回っている。奈良の大安寺のKono Seikoの仲介で計画された。「遠慶宿縁(緊密な関係は遠く離れている土地の間で起こる)」という言葉を知る。ただ、原元徳島県知事を通して、彼の四国訪問は既に四国中に知られ、行く先々で思わぬ歓迎を受けることになった。最初に着いた高松では親切な警官に感激し、こうした「Empfang 接待」は驚かせるとともに嬉しいと述べて、この旅行中にこうした親切をよく見かけたという。丸亀では自身も一時期収容されていた丸亀収容所があったところで、当時を知る地元の人々が面会に訪れた。死んだドイツ人の仲間の墓を参る。その後、高知に足を伸ばす。朝日新聞で板東のことを心をこめて書いたFukuda氏に礼を言うために、立ち寄ることにした。「高知、この美しく、古い静かな大洋に面した城下町」に満足したようで、風景を楽しみ、ここでも駅員や警官の親切に触れて、「高知には良い思い出が残った」。徳島では奈良のKono氏もやってきた。原氏は出張中だったので、同じくドイツびいきのOkamoto氏に案内される。地元徳島のテレビにも出演する。文楽の見学(十郎兵屋敷?)をし、「傾城阿波」を見て、「四国にはいつも巡礼の人々がいる」と述べる。この文楽で巡礼は日本中で有名になったとする。板東にはまだバラックが四棟残っていた。徳島新聞を見て五十人くらいの人が集まっていた。さっそく兵士の墓に参る。死んだドイツ人は無駄に死んだのではない。彼らはずっと友情の証として残ると述べる。ドイツ橋も見学している。ラジオ

局の Takeguchi 氏から、当時大水の時、吉野川の渡しで三人のドイツ兵が水に入りお客を担いで陸に上げたことが、ドイツ人の名声を高めたという話を聞く。ドイツ人墓地の清掃を続けたことでドイツ政府から勲章を受けた高橋春枝にも会う。計画中のドイツ館のことも聞く。翌日徳島から小松島に出て、神戸へ旅立った彼は、この旅を「忘れられない素晴らしい思い出になる」と述べている。なお、彼については娘のルビー・コーバーの、バートは収容所では勉強熱心だったという談話が残っている。（「二つの山河、上」（『歓喜』によせて4）、『読売新聞』2000年5月19日。）また、彼は吉村昭の小説『深海の使者』（文藝春秋、1976年。）に登場する。

ヘルマン・ボナー（ボーネル）（Herman Bohner, 1884—1963）は、福音派伝道教師の父がアフリカ黄金海岸にいたときにアポコビ（ガーナ）で生れている。故郷はバーデン・ヴェルテンベルクである。彼も板東俘虜収容所捕虜だった。チュービンゲン大で神学・哲学を学び、1914年にエアランゲン大で哲学博士となり、青島へ行った。そこの東洋学校でドイツ語講師、日本文化の研究を行う。義勇兵として応召し、捕らえられた。松山から徳島、そして板東へ送られた。収容所時代には講演会を開き、18年の「第九」演奏会でも講演した。ただし、彼は収容所内でも「反抗的な、扱いにくい人物」だったという。<sup>13</sup>戦後、大阪外国語学校（後に、大阪外国語大学）に勤務、四十一年間一度も休講にせず勤め上げた。五十年滞日。聖徳太子、世阿弥研究など、著書多数を著している。グンドルトとの交友もあった。雑誌 „Yamato“ と „Nippon“ に寄稿している。彼の四国についての記述については、筆者は今のところ見つけられていないが、その代わり彼の二人の弟が四国について貴重な記述を残しているのを発見した。<sup>14</sup>

また、ポーランド人でありながら板東収容所に入れられたフランシス・タデ

<sup>13</sup> 牧祥三「Altmeister ボーネル先生」、『ヘルマン・ボナー先生生誕百年記念展展示会パンフレット』大阪外国語大学ドイツ語学科研究室、1984年。なお、この冊子にはボナーの著作目録がある。

<sup>14</sup> 参考、大和啓祐「ふたりのボナーさん」、『鶏肋大和啓祐教授退官記念集』、高知大学人文学部独文研究室編、1992年。板東収容所にいたドイツ人については、瀬戸武彦「青島をめぐるドイツと日本（2）日独戦争とドイツ人俘虜」、『高知大学学術研究報告』第48巻人文科学別冊、1999年。「二つの山河、中」（『歓喜』によせて5）（『読売新聞』2000年5月25日）にはボナーの大阪外大時代の教え子で独文学者の乙政潤氏と船越克己氏、深見茂氏の回想がある。

ウス・ヘルトレについては、義理の娘だった安宅温の回想がある。（「二つの山河、下」（『歓喜』によせて6）、『読売新聞』2000年5月21日。安宅はヘルトレのことを『父の過去を旅して—板東収容所物語』（ポプラ社、1997年。）にまとめている。）

## 2-2 旧制高等学校ドイツ語教師たち

四国には旧制高等学校がいわゆる「ネームスクール」として、松山と高知にあった。そこでは英独仏語の第1外国語別に甲・乙・丙類に分けられていた。フランス語が置かれていたのはまれだったが、ドイツ語ではドイツ人教師が雇われていた。ヘルマンの末弟アルフレート・ボナー（Alfred Bohner, 1894-1958）は、1922年から28年まで松山高等学校と広島士官学校で教えた。むろん、兄ヘルマンの斡旋である。彼は、四国遍路の研究(Alfred Bohner: Wallfahrt zu Zweien Die 88 Heiligen Stätten von Shikoku. Tokyo (OAG) 1931.以下、ABと略す。)を博士論文として書いている。1927年、自身も四国遍路をしている。28年帰国、その後はドイツに帰り、フォアアルベルクに住んだ。

彼の遍路研究『同行二人巡礼 四国八十八箇所』は、伊予史談のメンバーの支援を受け、書かれた。出版にはグンデルトとマイスナーが協力した。この著作は四国巡礼と民衆の生活との関連についての考察をテーマとしている。当時京都帝国大にいたシラー博士やライシャワーの空海研究も踏まえ、日本での空海や四国巡礼の先行研究もよく渉猟している。内容は「四国の八十八霊場」に関して、「巡礼の歴史」、「個々の寺」について解説してから、「巡礼者」についてはその動機やいでたちについて、「旅の途上にて」の節では巡礼ルールや納経の仕方、接待と修業について、宿、巡礼の女性についてなど、自らの巡礼経験を踏まえて、多岐に渡って論じている。終章では「他力宗教としての真言」が論じられている。付録として、寺のリストと巡礼の用語解説、写真、参考文献、四国の地図が添えられている。

その中で四国の県民性の違いについて、遍路の「発心、修業、菩提、涅槃」というプロセスを阿波、土佐、伊予、讃岐に割り振ってその特徴を述べている。この巡礼については、世界の他の巡礼と同様に、不思議な力への信仰が働いているとして、ローマ・カトリックの国の巡礼と比較して無数の類似が見出される(AB, S. 66)とする。ただ、巡礼は日本人にとっては一種の楽しみでもあり、「極めて交じり合った喜び」となっているとしている。(AB, S. 67) 彼自身は



学校の夏休みを利用して、列車と車を使って巡礼しているが、ドイツ人らしく、寺の納経所の赤いスタンプが基本的にはドイツ製である (AB, S. 93) ことを報告することも忘れていない。彼のまとめでは「四国巡礼という現象を明らかにしようとして、精神的創始者から始め、巡礼の風習の成立について触れ、四つの国とその寺を考察し、最後に巡礼とそのいでたち、習慣を述べた。自分の体験も混ぜて、ある種の明確さでもって生き生きと描きだせたものと思う」(AB, S. 29)とされる。なかでも、彼が着目したのは、「接待」である。これは巡礼者だけではなく四国の人々に広範な影響を与えたとする。(AB, S.103)そして、この巡礼の特質を、「巡礼者が住民の参加をこれほど見出すところはほかにはない」(AB, S. 130.)として、住民も一体となった生活に根付いた宗教活動である点を高く評価している。日本の民俗学的要素に関心を寄せ、四国の特性を見事に洞察した本と言える。同様に、彼は『古今知恵袋』の翻訳も手がけている。(Alfred Bohner(übersetzt): *Japanische Hausmittel. Das Buch „Kokon Chie Makura“*. Tokyo 1927. (OAG Band11 Teil E)その「翻訳者の序」によると、この本は二百四年前のもので、今日でもその「知」は息づいている。これは典型的な文化の鏡であると述べている。また、これと同種の本『秘事思案袋』を高知で見つけたと述べている。軽井沢で1926年8月に執筆とあるので、夏休みに避暑で過ごしているときに完成させたものと思われる。

ただ、アルフレートは『日本と世界』(Alfred Bohner: *Japan und die Welt*. Langenfalza, Berlin, Leipzig 1938.)では、かなり軍国主義的論調を強めている。日本紹介の本であるが、彼は日本の公共心や犠牲精神を称え、ドイツも見習うべきだと主張している。これはヒトラーの精神に通じるものでもあるとしている。「遍路」研究の民俗学的研究からなぜこうしたナチズムに迎合するような主張へ傾いていったのだろうか。その背景を探ることは、今後の課題としたい。

ヘルマンの次弟ゴットロープ・ボーナー(Gottlob Bohner, 1888-1963)は、インフレのドイツからやはり兄の誘いで日本にやってきた。1925年から28年まで高知高等学校で勤務している。妻とまだ小さな息子を連れてくる。(息子のハインリッヒは、1983年に松山と高知を再訪。)『東アジアへ』(Gottlob Bohner: *Nach Ostasien im Zeichen des Wiederaufstiegs*. Birkfeld=Rahe 1931.以下、NOと略す)と『日本での一年』(Gottlob Bohner: *Ein Jahr in Japan*. Köln 1942 (1930). 以下、EJと略す)を著す。『東アジアへ』はドイツを船で出発して高知に赴任するまでの旅行記である。神戸で兄ヘルマンの家に立ち寄り、「文学の夕べ」にも参加。ヘルマンが阪神電車での通勤が苦になって、学校の官舎に越し

たがっていることを知る。また、日本の列車は停車時間が短い、息子が尿意を催したときは列車の停車時間を遅らせてくれたとか、日本の家は開けっ放しで、そのため垣で目隠しをしているのが、西洋のように家は閉じて庭は覗けるようにしているのと逆だと指摘したり、駅弁は安くて栄養もあると述べるなど (NO, S. 80 ff)、旺盛な好奇心と異文化に対するバランスのよい細かな観察眼を感じさせている。

1925年4月に四国に入り、まず弟アルフレートのいる松山(道後の近く)に立ち寄る。四国については、二百年前に始めてきたドイツ人(:ケンペル)が日本を世界に模していたが、それによれば四国はオーストラリアだと述べている。(NO, S. 74)高浜で四国に上陸すると、土地の人々に珍しがられ、いよいよ田舎にきたんだと思う。(NO, S. 87)列車ではたまたまドイツ語を話す医者と乗り合わせ、難しい本は読むが話す方はだめだと知り、これから始まるドイツ語教育のことを想像したりする。(NO, S. 89)高知へは義妹とその娘がついて来てくれる。乗り合いバスで山を越えていく。高知に到着しても学校の人は迎えに来ていなかったが、高校の生徒がドイツ語で話しかけてきて、学校に案内する。家は城山公園の近くの一階屋で、気に入る。学校は二年前にできたばかりで、すべてが真新しい。高知には欧米人はイギリス人の同僚とアメリカ人の牧師一家がいるだけである。当時、彼は日本語ができなかったが、やがて日本語を身につけた。そのため、ここでも日本語に対する関心の高さが伺える。たとえば、「高知」は「高い知」であるなど、いちいち地名をドイツ語に訳している。また、「この土地はちなみに古い文化の国なのだ」と述べ(NO, S. 101)、文化に対しても関心を寄せている。

次に、『日本の一年』は、高知での生活を後一年残すだけとなったところから日記形式で書いた好エッセイである。四季の移り変わりを捉え、夏を過ごす富士の近くのニノオカでの避暑、秋の室戸への遠出なども印象深く語られている。当時の高知の様子も細かく描かれている。町にある薬局に「アポテカー」とあるのを見て、「ドイツの学問への尊敬の念の証」とみたり、(EJ, S. 7)種崎への船での遠足、蚊やムカデに悩まされたり、漬物は価値がある、ご飯がやわらかいので、歯にいいビタミンもある(EJ, S. 15)とドイツ人らしいコメントも付ける。また、避暑から帰る途中、ヘルマンの所へ立ち寄る。今は神戸から大阪の住吉に住んでいるが、兄は生憎留守だった。(EJ, S. 64)

ちなみに、『日本の一年』は前作『東アジアへ』の裏返しになっている。たとえば、前者ではすぐ散ってしまう桜にがっかりしたとしていたのが、後者で

は桜の文化的意味に言及し、城山公園の桜を愛でている。高知に赴任したとき迎えがなかったが、後者では日本を去るときには、学校を挙げて関係者もみな集まってお別れ会を、それも何度にもわたって行われたということになっている。土佐のイメージも堅いものから人情深いものになっている。バスがすれ違うときには「ありがとう」と声を掛け合うし、巡礼者に冷たいという見方（おそらく、八十八ヶ所巡りをしたアルフレートからの聞いたのだろう。）は、実際に住んでみるとよそ者に決して冷たくはない。息子のハインリッヒにも日本人の友達がいる。四国の自然にも愛着を持っている。息子は蛙の鳴き声を喜び、(EJ, S. 70)ゴットロープ自身は一家そろっての遠出を楽しみ、秋の海を見ては「この秋の海岸を太陽の光ともども故郷に持って帰れたら」(EJ, S. 69)と述べている。とにかく彼は日本での生活を家族ともども楽しみ、周囲の日本人の中に溶け込んだ生活を送っていたことがよくわかり、外国人の見た当時の四国の様子が知るうえで、非常に興味深い資料となっている。

ベルント・エーバースマイアー (Bernd Eversmeyer, 1906-1998) は、ヴェストファーレン州ビーレフェルト生れで、1939年から41年まで、DAAD (ドイツ学術交流会) 派遣で、旧制高知高等学校ドイツ語教師、41年から45年まで京都のドイツ文化研究所所長を務めた。47年から57年まで帰国。57年から65年まで再来日、東京独逸学園校長を務め、65年帰国し、71年からボッフム大東亜科学研究室で日本学を専攻する。87年高知高校創立65周年記念祭で再来日。徳島経由で帰る。96年博士論文提出。細井宇八氏の訳が出ている。(『危殆の士 ある同時代人の判断と後世から見た菅原道真』、1991年。) <sup>15</sup>この著作は、死後同時代人からは復讐の雷神と恐れられていた菅原道真が、後世、博愛的天上の存在に変わり、あらゆる怨恨と憎悪を克服することを求めることにおいて、今後とも特殊な価値を持つとして、道真伝説を時代ごとに検証し、その根底にある日本人に顕著な死者との関係、畏敬と崇敬の念を明らかにしようとしたものである。江戸時代の「菅原伝授手習鑑」や昭和初期の国粹主義的文脈での評価なども検証している。彼が道真に興味を持ったのは、ドイツ語教師をしていた高知時代、建国記念日に道真伝説を始めて知ったことだった。「天神様」に同僚に連れて行かれ、そこで高等学校の生徒が試験の苦しみの助けを求めているのを見ている。高知での当時の道真像は、軍国主義的だが、しかし、

<sup>15</sup> 参考、上田浩二他『戦時下日本のドイツ人たち』、集英社新書、2003年。戦時中のエーバースマイアーの消息についての記述がある。

人々の道真観は「学問の神」である。時代による評価の変動と庶民信仰（遠流への流摘者への同情、死者への畏敬など）が並存していることに興味を持ったものと思われる。ちなみに、戦後における人間としての道真像については、徳島出身の瀬戸内晴美の作品からも引用している。なお、彼の次女ズィビレ・ラウシャアー（パッサウ独日協会会長）が2004年に四国に来ている。

### 2-3 現代作家たち

ギュンター・グラス (Günter Grass, 1927-) は1978年に来日し、高知を旅行している。再婚した新しい妻とともに、二週間の滞在中、自らの版画展（渋谷パルコ）のためとゲーテ・インスティトゥートの主催の講演などで東京、京都、大阪、神戸を回った。大江健三郎や川村二郎との対談や日本の独文研究者たちとの懇親会、木版画センター訪問などをこなしている。そして、「本能的に」選んだという高知にはまったくのプライベートで五日間滞在している。彼はライトバンで高知から足摺へ向かうが嵐にあつて途中で断念した。日曜市をのぞいたり、浜辺で魚を焼いたりして過ごして、「海と人間との関係が魅力的だ」と述べている。（高本研一「グラス、日本の二週間」、『すばる』1978年6月号、163~165頁。）グラスの大都市より田舎、所詮は文化の折衷にすぎぬ歴史的建造物や外国人がよく訪れる名所などよりは、その地に住む人々の暮らしぶり、特に食文化により強く興味を示している。調味料や植物の種などを買って帰っている。妻ウテを、海をバックにして描いたスケッチがあるが、おそらく高知滞在中の作品だろう。

その時のグラスと大江健三郎との対談「文学と戦争体験—地域性の力」（『海』1978年5月。）では、「私の出身地は、今日ではポーランド領となった旧ドイツのダンツィヒでして、しかも郊外のヴァイクセルという河の河口のあたりの地方で、私は作家としてそこから完全に離れることはないと思います」と述べて、自らの文学における「地域性」について触れている。そして、「私は、文学の場は大都市ばかりではないし、中央志向、大都市志向というものは、文学の障害にさえなることもあると思う。アメリカについて言いますと、地域的特殊性を知らなければ、今日のあの尖鋭化された人種問題も理解できないでしょう」と述べ、文学における地域性において四国出身の大江との対話を始めている。

さらに、その十二年後のグラスと大江健三郎との対談「ドイツと日本の同時代—多様性・経験・文学」（『群像』1991年1月。）でも「地域性」を話題にしている。今度の対談はフランクフルトのブッフメッセで行われたが、そこでグ

ラスは四国を旅行したときのことを回想し、自分が抱いていた日本のイメージは間違っていたと述べている。それによると、四国の山奥に行くとまだ前近代的な日本があった。それは西洋化・近代化した日本とは異質なものだだったという。さらに、「私はその小説（大江の『万延元年のフットボール』—筆者注）を読みまして、ほとんど自分のふるさとの小説のような気がしました。異質な感じが全くしなかったわけです。その意味で、文学が二つの世界をつなげている感じがします。文学というのは、非常に正確な言葉で描かれているものであるならば、どんなに田舎の文化を描いても、両方の文化をつなげることができるわけです」と述べて、日本との対話がこうした二人の作家が担う「地域性」において可能となったことを示唆している。<sup>16</sup>

ドウルス・グリーンバイン (Durs Grünbein, 1962 -) は旧東ドイツのドレスデン生れの詩人で、1995年にドイツで最も権威ある文学賞をすでに受賞したドイツで最も注目されている詩人である。彼は1999年と2002年に来日している。彼は日本の印象を俳句風の短詩にして発表している。(『ドウルス・グリーンバイン詩集 墓碑銘・日本紀行』、縄田雄二編訳、中央大学出版部、2004年。) 1999年に日本独文学会に招待され徳島に来ているが、その時のことについての詩がこの詩集の中の詩「眼鏡に落ちた雨粒」の中にある。

「六月二八日、海に囲まれ洗われる国、日本に初めて旅したときを思い起こして。徳島では内海を太平洋から分かつ海峡に立った。

さきおとし

潮騒を耳に

われ鳴門に立ちき。」(同書、62頁。)

ちなみに、同書の注によると、「『鳴門に』は、原文では、この固有名詞のもともとの意味をドイツ語に訳した„Am Schreienden Tor“『叫ぶ門に』という表現が使われている」。(同書、62頁。)

<sup>16</sup> 参考、高本研一「グラス、日本の二週間」、『すばる』1978年6月号。ギュンター・グラス「さまざまなユートピアと競争しながら—アジア、アフリカを旅して—」(高本研一訳)、『世界』1978年9月号。ギュンター・グラス「アジアから還る—ユートピアとの競争」(岩淵達治訳・解説)、『海』1978年10月号。依岡隆児「地域性に関する比較文化的考察—作家グラスの見た日本、アジア」、『徳島大学総合科学部言語文化研究』第7巻、2002年。

### 3. ドイツとの関係でみた「四国」(2) —ドイツゆかりの四国の人々のテキストから

#### 3-1 翻訳者・文化紹介者

井上勤(1850-1928)は徳島生れで、外国文学翻訳者だった。井上不鳴(藩医)の子で、オランダ人ドンクル・クルチウスに英語を学び、十六歳で神戸のドイツ領事の通訳になる。その後、大蔵省、文部省、参事院、宮内省を歴任、1890年退官後は、英独仏の文学を一般向けの翻訳、『英仏独和近世会話篇』(岡崎屋書店)、独和辞書、英文法書、英会話書などを出版した。『西洋珍説人肉質入裁判』(1883年、『ベニスの商人』の訳)や、『独逸奇書狐の裁判』(春陽堂、1884年、ゲーテの『ライネケ狐』の訳)などがある。<sup>17</sup>

前述の久松定弘は『独逸戯曲大意』(博聞社、1887年。)で欧化主義の行き過ぎをいさめ、当時の演劇改良論に反論しつつ、ドイツ留学時に集めた文献をもとに演劇一般の解説を試みている。<sup>18</sup>最後に、「芸林の泰斗」は西洋の原則にも適う要素を持つとして、近松門左衛門の「浄瑠璃文句評註難波土産抄録」を載せて、早くも、比較文学的視点を出している。他に、『明治獨和辞典』(東京共同館、1887年。)の校閲をしている。

黒田礼二(1890-1943)は高知・大篠村生まれのジャーナリストである。東大を出て、満鉄に就職、1923年渡欧した。ベルリン在留中、朝日新聞社入社、特派員として32年まで滞在した。表現主義の作品の翻訳がある。<sup>19</sup>1930年から31年まで二百四回レマルクの『その後に来るもの』を朝日新聞に訳載。1934年から35年再度ベルリンに渡る。『日独旬刊』紙を発行し、ドイツ事情を紹介した。1941年にダレエの『血と土』翻訳(春陽堂)するなど、ナチスのイデオロギーに感化されていく。前衛的作品に理解を示し、レマルクなど反戦的・反ナチス的な作家の翻訳を手がけてきた彼が、なぜナチスのイデオロギーに惹かれていったのだろうか。戦後には、高橋義孝(1913-1995)が、旧制高知高等学校出身の独文研究者で、翻訳家、エッセイスト、評論家として活躍した。

<sup>17</sup> 参考、宮岡常夫『井上勤の翻訳をめぐる』、四国大学、1992年。

<sup>18</sup> 参考、上村直己『明治期ドイツ語学者の研究』、多賀出版、2001年。

<sup>19</sup> 黒田の表現主義関係の翻訳は、『転変：表現派代表戯曲』、大鏡閣、1922年。『表現派戯曲集』(群集人間：エルンスト・トラア、海の戦い：ゲーリング、瓦斯：ゲオルグ・カイザア、朝から夜中まで：ゲオルク・カイザア)、叢文閣、1924年。『どっこい、生きている』(トラア)、平凡社、1930年。(世界プロレタリア傑作選集)

### 3-2 ドイツ留学者の文化比較

前述した長井長義のベルリン生活はどんなだったろうか。彼は、『長井長義書簡抄』（青井石子編・発行、1929年。）、ならびに『長井長義伝』（前掲書）によると、最初にベルリンに留学した頃は、言語も風俗もよくわからず、ベルリンの十一、二歳の子どもがラテン語を学んでいるのに感銘を受けている。1907年には女子高等学校などの視察に再度ベルリンを訪れる。さらに1927年のドイツ滞在に際しては、ベルリンについてすっかり変ってしまった姿に「伯林市に参りました心地がしません」と述べている。オペラ鑑賞を好み、「高尚の思想と国語を学ぶには観劇程有効なものはありません」と述べたり、都市風俗についても「生活状態を高尚美麗にならしめるのが文化の一条件」とし、道路や町並みの整備されていることに感激し、「全市が大公園の様に見えます」と述べて、文化的意識の高いベルリンから日本の現状と進むべき方向を見ていることがわかる。また、徳島で計画されていた薬学科設立については、ドイツの工場を視察して、「薬工学技術養成の必要をますます感じた。実力の養成、教授方も実地を先にし、講義を後に」し、「教授と学生が協同して学び且つ研究する」ことを取り入れるべきだとしている。こうした実験主義ともいうべき「気質」は長井自身がドイツで研究者として身をもって習い憶えたものだったといえる。滞在中、年末を迎え、「日本のお正月が恋しうありました。おかちん（祖母さんの）を喰べそこないました」と書き、故郷のことを異国で懐かしんでもいる。

また、アネッテ・レペニス（『日独いしずえの歴史—長井長義』、前掲書。）によると、長井はベルリンでは最初、ホルツェンドルフ夫人、後に「日本おばさん」ことラーガーシュタイン夫人の下宿にいた。ドイツ人テレゼと結婚し、日本に連れて帰る。彼女は自身も女子教育に熱心で、双葉学園でドイツ語と家政科を教えた。長井は1899年に徳島に里帰りしている。藍の産地徳島のために、藍の抽出過程を改良し、パリ万博（1900年）で金賞を受賞している。教育に関しては、ドイツの大学制度を理想化していたが、専門化に対して精神科学と自然科学の総合を図ることに賛嘆している。国内大学では外国人に依存せず、製薬を国産できるようにすべきと説いている。「ヨーロッパにいと、日本が最も大切になる。全てを日本と比較する。それを通じて日本を愛し、日本を優先させる。外に出なければ、人はこの真実を知ることはないだろう」と言うように、外国生活が長かったが故に日本への愛着が深まったようである。これからの日本に望むこととしては「知恵を搾り出す努力」であり、科学技術は人間の生き方や生活態度に裏打ちされているべきだと述べている。日本女子大学

(1883年~) 創設に尽力、校長も努めているように、女子教育には特に力を入れた。

寺田寅彦(1878-1935)は高知生れの物理学者、エッセイストである。ベルリン等に留学している。『寺田寅彦全集第十五巻書簡集1』(岩波書店、1951年。)では1901年10月にベルリンからゲッチンゲンに移ったときのことが述べられている。「伯林に比較してひなびたところが面白く候、閑静なのが何より結構に御座候」。(同書、133頁。)高知宛の手紙では「西洋も東洋も田舎は変らぬ。日本でも東京の様な所で育った人と自分の様な田舎で育ったものとはたしかにちがう」(同書、133頁。)とあるように、ベルリンより田舎のゲッチンゲンが彼には気に入っている。西洋と東洋の違いというより都会と田舎の違いという対立軸で見えるようになっている。東京宛の手紙には「いよいよ田舎に引込んだ。秋葉黄落、此れから冬籠りの支度にかかる。しかし東京から高知へ帰った様な気がして悪い心持はしません」(同書、135頁。)とある。「旅日記から(明治42年)」『寺田寅彦随筆集第一巻』(岩波書店、1950年。)では、1909年の渡独のことが述べられている。5月5日にドイツに入る。車窓からの風景を見て、「淋しい野道を牛車に牧草を積んだ農夫が唯一人ゆるゆる家路に帰って行くのを見たときには一寸軽い郷愁を誘はれた」。(『寺田寅彦随筆集第一巻』、568頁。)一方、ベルリンについては「妙に鈍い灰色をして居た」とあるように、ベルリンなどの大都会には失望したが、しかし、田舎の風景には郷愁すら感じ、親近感を抱いていることがわかる。

寅彦はまた、ドイツ・ヨーロッパと日本との比較を様々に試みている。例えば「日本人の自然観」(昭和10年10月岩波講座「東洋思潮」、『寺田寅彦全集第五巻随筆5』、岩波書店、1950年。)によると、ドイツの「ウェッターロイヒテン」と日本の稲妻は同じ現象であっても違うとし、ドイツのそれは決して「稲田の闇を走らない」としている。(同書、575頁。)同様に、「春雨」も「秋雨」も西洋にはないという。そうした違いの背景に西洋諸国では「自然の慈母の慈愛が案外に欠乏している」点を挙げている。彼らの自然を恐れず克服しようとする科学はそういう風土から生れたとする。彼は風土がその土地にあった文化を工夫するとして、日本人には洋服より和服が理に適っているし、「蓑はその機構の巧妙と性能の優秀なことに今更に感心」して、「バーベリーのレーンコートより」優れているとしている。(同書、592頁。)また、短歌・俳句は文芸の中でも日本の代表であるとして、「これらの中の自然は科学者の取り扱ふやうな、人間から切離した自然とは全く趣を異にしたもの」(同書、601頁。)とし、そ



こに「人と自然の渾然と融合したものを見出すこと」に日本的なものを見ている。そして、最後に「日本のあらゆる特異性を認識してそれを活かしつつ周囲の環境に適応させることが日本の使命であり存在理由であり又世界人類の健全な進歩への寄与であらう」として、「世界から桜の花が消えてしまへば世界は矢張それだけ淋しくなるのである」（同書、608頁。）と結んでいる。彼が個々の文化を普遍的に一元化することではなく、こうした個別文化がそれぞれの特質をよく自覚し発展させていくことが世界性へ寄与することであると考えていることがわかる。

### 3-3 「比較文学者」たち

寅彦の個別文化の十全な個性化が「世界性」に寄与するといった考え方はゲーテの「世界文学」の考え方にも通じる。また、こうした「世界観」は、岡崎義恵や土居光知などの同じ高知出身の学者たちにも共通する考えである。日本文化の「渾然、融合」性という考え方でも両者と似ている。

ちなみに、岡崎義恵（1892—1982）は高知生れで、文学を芸術的なものの一様式と位置づけ、「文芸学」を提唱した。従来为国文学が文献学的で、雑学的だったのに対して、美学を基に文芸的価値や文芸性を究明しようとした。東北帝大で日本文芸学研究、「日本詩歌の気分象徴」など、ドイツをはじめとする西洋の文学との比較をおこなった。ゲーテの「世界文学」に言及している。日本の文芸の特質は「渾融」性であると論じている。（『岡崎義恵著作集2日本文芸の様式と展開』、宝文館、1962年。日本文芸の様式的特徴を「抒情的、印象的、単純、優雅」、あるいは、「年少的」で「渾一的」「非構築的」なもの、すなわち、一言で言えば、「渾融的」なものとしている。この概念自体がドイツに由来している。）岡崎は日本の「文芸学」の概念については、大正期から昭和にかけて流行したドイツ風の文芸学、すなわち、ディルタイの精神史に影響されて、従来の文献学に対抗する概念として入ってきたが、その後すぐに英米仏系の文芸理論に押されていった。「それで、（中略）ドイツ文芸ふうの文芸学は、今日どうなったかと思う人もあるであろう。ところが、それはむしろ国文学にはいって、今日でも一学派をなしているとも考えられないことはない。私も実はその学派の一人と見られるかもしれない」（岡崎義恵「日本文芸学の伝統」、『日本の文芸』、講談社学術文庫、1960年。）と述べているように、岡崎は自分の日本文芸学がドイツ文芸学の影響のもとに成立したことを認めている。この背景には、岡崎が大学で学んだ師が芳賀矢一や上田万年といったドイツ帰りの国文学者だった

ことも関係している。

土居光知は高知生れの英文学者で、『文学序説』（岩波書店、1922年。）などの著作がある。彼はやはりゲーテの世界文学に依拠して東西の芸術的特性の相違を論じている。「世界文学」を「世界文学の片隅に日本文学を置いて見ようとするような比較研究の態度」と称する。すなわち、「世界文学」は「世界の政治上及び言語上の統一を条件とするものでなく、国民文学の最も円満な発達の上に予想される超国民的文学」であるという解釈をしている。（土居光知『国民文学と世界的文学』、岩波書店、1949年（1942年）、256頁。）<sup>20</sup>また、彼が研究したアーノルドやカーライルはドイツ文学を研究した人であった。したがって、彼の「多元的文学性」の考えはゲーテから来たドイツ系の世界文学概念に由来しているといえよう。（土居光知『東西文化の流れ 土居光知対話集』、研究社出版株式会社、1973年。）

このように、岡崎も土居もドイツ文学が専門ではないが、両者ともゲーテに依拠して、日本文学と世界性とを結ぶ回路を開こうとしたいえるだろう。この点については稿を改めて論じてみたい。

高浜虚子（1874-1959）は松山生れの俳人、小説家である。彼は1936年にヨーロッパ旅行に出て、ドイツで講演を行っている。「ベルリンでは、ベルリン大学の日本語学科の教師や生徒が、俳句の話聞きたくて要求を持ち出しまして、日独協会の会長であったベンケという人を初めてとして多くの人々の集まった中で俳句の話をしました」。（「俳句の講演」、『俳句の五十年』中央公論社、1942年。）さらに、このヨーロッパでの「ハイク」に触れる中で、「日本独特の俳句」について考察をするようになる。それによると、外国人に俳句を教える際に一番難しいのは「季題」であるとしている。西洋ではもっぱら音節の数のことが問題にされるが、季題のことは無視されることが多い。それは日本の四季の移り変わりや自然の変化が世界的に見ても日本ほど恵まれた所はないため、日本では国民の間で四季や風景に対する関心が極めて高いためである。「それがつまり風景美であり、四季の変化をうたふのを専らにしてゐる俳句といふものを生んだ原因」（「日本独特の俳句」、同書、242頁。）だからである。彼はこのように、ヨーロッパに触れることで日本の独自性を考察するようになり、そこにあらためて日本の「自然」の独特さを発見したというのである。その反面、虚子は西洋人が俳句がわからないという考え方は否定している。むしろ、日本

<sup>20</sup> 参考、富田仁『日本近代比較文学史』、桜楓社、昭和53年、77～78頁。

人で誰がそれをわかっているかと問う。また、過去、西洋人によって日本の美術工芸の価値が発見されたことを挙げ、西洋人でも日本をよく理解するようになれば、俳句はできるよくなる」と述べている。（「西洋人に俳句の趣味は判らぬか」（昭和5年9月）、『俳談』、岩波文庫、1997年、55頁。）1938年創刊の、『ホトトギス』の後進雑誌『俳諧』には「外国における俳句」の欄を設け、英独仏の訳を添えるようになったし、山口青邨「ベルリン便り」も連載された。虚子が俳句を国際化しようとしていたことがわかる。なお、虚子のドイツ旅行に際しては「素人」こと、独文学者の藤代禎輔のアドバイスを受けている。ベルリンではベルリン大学の日本学の学生「ビュルガ姉妹」ともめぐり合う。また、そこで日本に来て「パンの会」に関わり、第一次大戦中は大分と習志野の俘虜収容所にいたフリッツ・ルンプにも会っている。<sup>21</sup>

片山敏彦（1898—1961）は高知生れで、東大独文出身である。『ドイツ詩集』（1943年）を出し、ロマン・ロランとの交友、ロランの翻訳家として有名である。1929年から31年にかけて、フランス、オーストリア、ドイツ、イタリアに行き、シュテファン・ツヴァイクやシュヴァイツァー、ロマン・ロランなどに会っている。<sup>22</sup>彼の場合、幼少の頃の故郷高知のイメージがヨーロッパのイメージと通じるものとして捉えられている。その際、特に、フランス象徴主義の「照応（コレスポンド）」がこうしたイメージのつながりを可能にしている。

彼自身は医者になるのが嫌で、独文科に進む。やがてそこからさらにフランス文化や芸術に関心に移っていくが、「魂の聖堂」では互に通じるものがあると確信していた。高知での少年時代については井上勤の『狐の裁判』などを読んでいた。母と行った海からは、その深い底に紅白の珊瑚の樹があったというヴィジョンを抱いている。（「旅にみるともしび」、『詩と散文』、小沢書店、1989年、278頁。）そして、老境になり長野の山にこもってからも、夢の中ではこの故郷の母なる海のイメージには珊瑚の樹が現れる。（「たてしな高原」、同書、179頁。）この深い海底にある珊瑚は、様々なイメージが生れ出る源であり、彼の世界性の根幹を成すものであった。妻を亡くしたとき、フランスの友人マルチネ夫人から励ましの手紙をもらい、故郷に帰ることを勧められる。その足摺に向かう海岸の道で妻のまぼろしを見た、とするとところからは、母なる海のイ

<sup>21</sup> 参考、『定本高浜虚子全集』第十四巻紀行・日記集、毎日新聞社、1974年。

<sup>22</sup> 参考、『ヴィジョネール・片山敏彦の世界 片山敏彦生誕百年記念』、高知県立文学館、1998年。

メージにおいて妻の姿を捉えていたことが明らかになる。(「永遠に母なるもの」、同書、188頁。)

こうした片山は、フランスの片田舎のミレー的な世界に親近感を抱き、パリとは異なるものを感じている。そこでは古いものと新しいものが創造的な総合を生み出すのだと述べている。(「フランスへの回想」、『片山敏彦著作集8』、159頁。) やがて、こうした感覚は、「全く見知らぬ土地の見知らぬ風土の珍しさが、最も親しいもの忘れていた記憶を再発見させてくれた」(「照応」、『片山敏彦著作集8』、73頁。) という「照応」という考え方に惹かれていく。自己を深めることが広く繋がることになるというコスモポリタンな考え方や、ゲーテの「原型」や *Urharmonie* という思想、ロランにみるヨーロッパヒューマニズムの伝統に、精神の連帯を感じとり、戦時下においても国境を越えたつながりを見た。また、「科学も文学も哲学も、自己を深めることでおのずと他の文化機能に再会する『中心』を求める」(同書、73頁。) といった、クロス・ディシプリンな発想へと展開していく。こうした思想から日本においても比較文学・比較芸術学を振興し、それぞれの領域が相互の浸透と交易を行いながら総合に向かうということに期待をかけた。(「象徴性のかけ」、『片山敏彦著作集8』、21頁。) 片山の場合、こうした幅広く、脱領域化していく活動は、故郷の母なるイメージの中に確かな「核心」を持っていたといえるだろう。

佐古純一郎(1919-)は徳島生れの文芸評論家である。ドイツ文学の専門家ではないが、ブーバーと出会い、ヘッセの紹介を行い、ドイツとの縁も深い。1991年4月から92年3月まで、名誉牧師として所属する日本キリスト教団中渋谷教会での、十回の「土曜講座」でヘッセを取り上げている。(『ヘルマン・ヘッセの文学』、朝文社、1992年。) これによると、彼は1938年、二松学舎に入学した頃からヘッセを読んでいる。彼はヘッセの東洋志向に触れ、日本にもきっと興味を持ったはずだと述べている。『青春は美わし』でヘッセの「懐郷心」に触れ、「郷里を想う心、これはヘッセがずっと最後まで持ち続けて」いたことを読み取る。(同書、114頁。) そして、「こういう、郷里に久しぶりに帰った思いというのは、地方に生まれ育ち、いろんな事情で他に行っていたが、久しぶりに郷里に帰ったというような方は、何かやっぱり共通した思いがおありになるんじゃないでしょうか」(同書、118頁。) と述べて、ヘッセを、地方出ということから理解していこうとしている態度が伺える。『知と愛』の解説の時には、「ゆうべ寝床で、ここのところ読んで涙が出ちゃった。だって、私は母を知らないんだもの」と述べている。さらに、「ヘッセは最初の詩集をおふくろに献

げようとしたが、それが間に合わなかった。それ以来、ずっとヘッセはおふくろを心にいだき続けてきたんじゃないかな」(同書、231頁。)と述べている。佐古は生後二ヶ月で母をなくしている。その分、余計に母への想いをヘッセの文学に読み込んでしまったのかもしれない。ヘッセの「甘さ」はそこにあるが、自分がヘッセを若いときから好きなのはそこから来てもいると述べている。このように、佐古のヘッセ理解の根底には故郷への郷愁と母への想いへの共感があったといえよう。

また、佐古の自伝である『私の出会い』(審美社、1979年。)では、彼が1962年2月27日に、「先生」と崇めていたマルチン・ブーバーに、イスラエルで会ったことが述べられている。イスラエル政府に招かれた代表団の一人として、一ヶ月滞在していたが、ブーバーと会った日エルサレムには珍しく雪が降ったことが印象深く語られている。佐古のブーバーとの「出会い」は1923年に出た翻訳で『我と汝』を読んだことである。この「出会い」は彼に人生における「根源的な意味に目醒ませて」くれたと述べている。(同書、72頁。)まさにブーバーの哲学自体が「出会いの哲学」でもあった。ブーバーと実際に会った後、佐古はその著作集を訳文と対照させてドイツ語で読んでいる。(同書、73頁。)ブーバーのことは、キリスト教徒である佐古は「ユダヤ教を根拠にする思想家」ながら、「イエスという存在を、きわめて高く評価」した点で驚嘆している。(同書、75頁。)彼はブーバーの「出会い」＝交流の思想と、広い人道的思想によって狭い宗教的対立を超える生き生きとした活動に、惹かれていたのである。以上のように、四国の文学者に狭い専門性を越えて異分野と交流しようとする「比較文学者」が多いことは注目に値するだろう。

大江健三郎(1935-)は愛媛県大瀬生れで、東大仏文科を出た作家である。ドイツでもたくさんの作品が翻訳されている。グラスとの交友については既に述べたが、彼は1991年のフランクフルトのブッフメッセで講演をしている。(大江健三郎「なぜフランクフルトに来たか?」、『人生の習慣』、岩波書店、1992年。)また、この同じ本に入っているルーヴェン大学での講演「日本の周縁とヨーロッパ」を元に後に大江が書いた文がドイツからも出版されている。(Oe Kenzaburo: *Wie ein junger Mann aus Japanssperipherie zum Schriftsteller wurde*. In: *Traumbrücke ins Ausgekochte Wunderland Ein japanisches Lesebuch*. Frankfurt a. M. und Leipzig 1993.) ここではまず、長崎沖で遭難したヨーロッパの船の船首像だったエラスムスの像を、東日本の領主が買い取り、キリスト教迫害を恐れて、中国の守り神である「貨狄尊者」として神社に

祭ったのには、「深い知恵」を感じたと述べる。しかし、日本は明治近代以降、これほど深い知恵で西洋文化を受容してきたとは思えない。異文化への畏怖の念とその多様性において劣るのではないか？自分は四国の森に、日本の群島の周縁にある島で生れたので、東京に出て西洋の方法を身につけてから、自分の生まれ育ったローカルな文化を書きたいと思った。したがって、中央の文学伝統に連なろうとは思わなかった。むしろ、周縁の伝承の伝達者になろうとした。そして、作家として森の神話の世界をラブレのグロテスクリアリズムのイメージシステムと結びつけることができた、とする。そして、こうした視点から沖縄や韓国の文学を発見することができたと述べている。

このように、大江は四国＝周縁の伝承を表現しようとした作家で、中央の文学へ対抗する意思があった。その際、西洋文学の手法を用いた。西洋文化の移入を伝統文化の新しい形での表現に結びつけるということで、地域へのこだわりが表層的な西洋受容に陥ることから彼を免れさせてきたといえる。あわせて、こうした彼の文学のドイツでの紹介は、日本文学の多様性を世界に示すことにもなったはずである。

その他、ドイツ文学者として、大山定一（香川）や高橋幸雄（高知）もいる。高橋は随筆集『梅檀の花』（皆美社、1985年。）を書いたが、太宰治との交友で知られている。（参考、九頭見和夫『太宰治と外国文学』、和泉書房、2005年。）

#### 考察・まとめ

四国と「ドイツ」の関係は、明治以来、近代化のモデルとしての「ドイツ」へたくさん四国出身者が行き、また、ドイツ人も戦争捕虜として、ドイツ語教師として、あるいは旅行者として、四国を見聞しており、意外に大きな交流が見出せた。ことに、その中でも、グラスや大江は、自分の「根」を実感する場として「四国」を捉え、片山敏彦にとっては世界とコレスポンドする根源的な場として「四国」があった。片山敏彦と岡崎義恵は「象徴主義」に世界性と切り結ぶ可能性を見ていたといえる。また、寺田寅彦や佐古純一郎、片山は、都会と田舎、あるいは「故郷性」という軸で世界性に通じ合う回路を求めている。ドイツ人たちは豊かな自然と遍路の国、特に「接待」という外から来た人々をもてなすオープンマインドな風土に魅力を感じてきたようである。四国は「田舎」であったため、他のドイツ人たちとの付き合いも少なく、地元の人々や同僚の日本人たちとの付き合いも密だった。また、軍国主義体制下でも、大都市圏とは違い、イデオロギー的締め付けは少なく、比較的のびのびとくら

すことができたようである。エーバースマイアーの場合のように、ナチス台頭後もナチスの監視を受けることはなく、リベラルな考えを貫くこともできた。彼らの幾人かは実際に四国の民衆やその文化に関心を示し、研究する人もいたほどである。同じドイツ人でもベルツやタウトらが見た日本とは自ずと異なる日本の姿があったはずである。それはまた、彼らドイツ人の中に郷愁をひき起こし、共感をもたらしたのである。

他方、四国出身でドイツに関係をもった人々の中からは、広い意味での「比較文学者」が多く出たことは注目し得る。分野を越えて、いわゆるクロス・ディシプリンで、活動したり、本業とは別に奔放なエッセイストとして知られた人もいた。日本の文化を絶えず世界性という視点から見ようとする傾向が彼らに共通していたからとも考えられる。それは、ひとつには、中央に出てもこの「四国」という地域性を持ち続けたが故に、均質的近代日本文化には懐疑的で、日本を画一的にみることなく、多様な相においてそれを発想しえたからだろう。また、極めて日常的なレベルから発想を展開しうる彼らの傾向はやはり四国が育んできた民衆性・雑種性・開放性に由来するものなのかもしれない。自然への愛着度も高い。虚子はもとより、寅彦、片山、岡崎ら「比較文学者」たちが共通して俳句愛好者だったことも偶然ではないだろう。ただ、他方で、こうした土着性や郷土愛が安易にナチスの「地と土」のイデオロギーや極端な文化根元主義、ドイツ的規律への親近感と結びつくこともあったことも忘れるべきではないだろう。

本論は、文献の発掘もまだ不十分であり、また、さまざまな問題点や論点を残したままにしている。このテーマについての更なる論究は今後の研究で継承していきたい。